

令和4年度 第1回美術館運営協議会会議録

1 日 時 令和4年7月14日(木)
午前10時30分～午前11時55分

2 開催場所 豊田市美術館 会議室

3 出席者 [委員]

栗田 秀法、佐藤 友美、近藤 かおる、飯野 優祐、伊藤 一廣
吉留 亜弥、加納 里美、木下 翔、茂木 明子(以上9名)
欠席:塚本 哲也

[事務局]

高橋 秀治、田境 志保、鈴木 俊晴、佐藤 薫子(以上4名)

4 会議の経過

委嘱状交付、館長あいさつ、委員自己紹介、職員紹介の後、美術館から豊田市美術館運営協議会の概要について説明した。

その後、委員の互選により、会長に栗田委員を選出、会長が佐藤委員を職務代理に指名した後、会長あいさつ、その後、議事録署名人として、会長自らを含む2名(佐藤委員)を指名した。続いて、令和3年度の実績を報告した後、各委員より意見を聴取した。

5 会議内容

事務局:

(1)令和3年度開催展覧会の実績報告について

年報No.26(令和3年度)及び「サンセット/サンライズ展開催実績」を用いて説明した。

会長:皆さんからのご意見やご質問をお聞きしたい。

委員:アンケート結果から、リピーターを増やすことが課題と捉えた。

豊田市は子育て支援が充実しているといわれている。子どものときから、ほんものに触れる機会をつくり、美術館に愛着を持つ大人が増えるといい。

事務局:次年度に博物館が開館することから、今年度から博学連携に重点的に取り組んでおり、市内の小中学校教員と美術館の鑑賞プログラムを作成している。また夏休みも子ども向けのツアーを企画している。子どもにも親しみやすい美術館をめざして活動している。

委員:小学生ばかりでなく中高大生向けの企画も必要である。特定の子もだけでなくオンライン等を活用しながら広くサービスを提供すべき。

会長:世田谷美術館など、全国の事例を参考にしながら、現場と学校をつなぐ仕組みの確立が大切。行政と連携するなどして続けられる方法を考えてほしい。

委員:「館長にきいてみよう」の企画は、大変興味深い。学芸員にインタビューすることを通じて美術館や美術館の仕事に興味を持ってもらい、中高生のキャリア支援につながる企画があればいいと思う。

館長:「館長にきいてみよう」は、オンラインで実施した。教員の多忙化解消との兼ね合いで、現場の先生の熱意がないと新規事業を広げるのは困難な状況にある。博学連携事業を通じて学校とのパイプを作っているところで、博物館が開館するというチャンスを活用したい。

委員:確かに先生たちは、忙しい。新規事業を行政から働きかけると断られてしまうかもしれないが、保護者から提案してみる方法もあるかもしれない。

委員:市のPTA連絡協議会の企画運営委員会に参加し、学校現場の大変さを感じた。新しいことをはじめるのが困難な状況にあると思う。本日この会議に参加するにあたり、娘が美術に興味を持っていることをはじめて知った。親が美術館に興味がなく、連れてきてもらえない子どもたちを誘導する方法を考えなくてはならないと思う。

委員:中高生になると、美術を見る経験が乏しくなる。さまざまな経験の有無が知識の格差につながる。いろんな層に経験を増やすしかけを作っていく。

会長:庁内の教育行政、文化行政の部局に働きかけていくことが重要だと考える。

委員:旅行先の美術館へは行くが、近くにある美術館に来るきっかけがない。地元の美術館に来たくなるようなPRが必要。機会があれば、親しみも深まる。

事務局：SNS等の影響が高まっていると感じている。紙媒体も含め着実にPRしていく。
まだ、来館したことのない方にも働きかけられるよう工夫していく。

委員：現代美術は、わからないから行きにくいことがあるのではないかと。展覧会の組み立てが若い人や専門家向きばかりに見える。

事務局：昨年のモンドリアン展は、建築、デザイン関係に広がりがあり、集客も多かった。
クリムト展、ブリューゲル展など数年ごとに現代美術以外の展覧会を構成している。

会長：たいていの館は、2～3年でバランスよく企画していると思う。一般のファンとコアなファン向けとバランスよく構成していくことが大切。

事務局：この数年で、若い層は現代美術に対する抵抗感が薄れている感触がある。

館長：社会の分断と同様に美術ファンの分断も生じている。個人的に美術に対する興味が細分化していると感じている。さまざまな分野をバランスよく展示していく必要がある。

会長：市の広報なら高齢者は見てくれるなど、対象別にふさわしいPRの内容と方法を検討すべき。

委員：来館者のニーズは、異なる。静かに観覧したい人、子どもと観覧する人が同じ空間に同じ時間帯に利用するのは難しい。例えば、静かに鑑賞するクワイエットタイム 子どもと感想を言いながら鑑賞できるハートフルタイムのような時間を設定してもらえると誰もが親しみを持てる、誰もが心理的安心を保てる環境が生まれるのではないかと。豊田市では、託児サービスもない。コンサートホールの0才からのコンサートは人気がある。美術館にもこのような企画があれば、リピーターが増えるのではないかと。

会長：ベビーカートツアーなど行っている館もある。広い意味でのユニバーサル化について事務局から何か説明があれば。

事務局：ベビーカートツアーは、過去に行ったことがあるが、常時実施はしていない。
今後も検討していきたい。

委員:夏休みは子どもたちをどこに連れていくかという問題が起きるが、美術館は静かにしなければならないので選択肢から除外される。ハートフルタイムがあれば親子で来館しやすい。トイレの個室にベビーチェアがないと困る。また、授乳室の空間が真っ白でとてもさみしい。壁に何か貼る等、美術館に来たことを実感できる工夫があれば乳児と来館した方の満足度があがる。

委員:公共施設利用マナーを育むのも美術館の役割。利用者間でどこまで歩みよれるか、広報、PRが課題なのかもしれない。

館長:個人的な思いでいうと、日本の美術館は、もっと気楽に作品を鑑賞する場になるといい。目の前の作品について感想を言い合えるような、寛容さが必要。美の殿堂というイメージで、ありがたく静かに見なくてはいけないという思い込みを払拭するために試行錯誤しながら考えていく。

委員:オンライントークは、夜間おこなっているが働く人たちの健康は守られているのか。また、名古屋市の美術館のようにビジネスマンのための夜間開館の実施はしないのか。

事務局:夜間の開館は、過去に実施したが来館者が少なく、実施しなくなった。

委員:当時人が集まらなかった理由は何か。

事務局:名古屋の中心部の美術館とは異なり、当館は買い物や食事のついでに立ち寄る、というのは難しい。仕事が終わってから、わざわざここまで足を運ぶ人が少なかったと考えている。土日の利用者が多いので、時間がある時にゆっくり過ごしたい人が多いと認識している。

委員:それは、どれくらい前の話か

事務局:10年くらい前だと思う。

委員:この10年でニーズは変化していると考え。ニーズの把握をした方がよい。

会長:他館の事例を研究しながら検討してほしい。

委員:まちなかの活性化に取り組んでいる。まちなかの託児所との連携など協力できそうなことがあると感じた。春のマルシェでは、美術館の来館者は、若い人が多かったが、マルシェの出店内容は美術館の来館者層とは少し違ったようだ。今後は

工夫していきたい。

会長：博物館法の改正でさまざまな機関との連携が求められるようになる。観光との連携の検討も進めていただきたい。

委員：マルシェに来た人の入館料割引はあるのか。

昨今、ビジネスにおいてデザイン思考、アート思考が必要といわれるようになったがどうしていいかわからない。とりあえず、美術館に来て学芸員に話を聞くことも難しく知識が深まらない。

デザインあ展のとき入場制限があり、親はチケットがとれないことがあった。子どもだけで入館させられるとよいのにといい声をきいた。

親に連れてきてもらえなくても、子どもたちだけで来られるしくみがあつたらいいかもしれない。

写真撮影ができる時間を分けるとよいのかもしれない。

事務局：マルシェに来た人の入館料割引は特にない。いただいたいろいろなご意見を参考に、館内で協議していきたい。

委員：トヨタ博物館でも、ナイトミュージアムにトライしたがうまくいかなかった。

小学校高学年以上の来館が少ないのは、多くの館にとって同様の課題である。

市外在住者の視点から、文化観光の視点から外向けの戦略はあるのか。

収集予算が令和3年度はつかなかったときいたが、単年度のことなのか中期的なことなのかお聞きしたい。

事務局：観光については、市内の有名建築家が設計した施設や博物館と連携した取組ができるのではないかと考えているところ。

令和4年度は収集予算が確保できている。単年度予算のため、毎年確保できるよう努力している。

委員：この美術館の規模で、大規模展覧会が開催されると、市民が来館できなくなつたり、来館者がゆっくり鑑賞できないという問題が生じる。ただ、人を多く集めればいいというものではないと考える。

事務局：単なる集客をめざすのではなく、美術館の社会的価値、存在価値を高めていく取組を行っていく。

委員：子ども連れに寛容さをうちだすコンセプトは集客に効果的であり、観光戦略にもつなげられると思う。

館長:いろいろ大変参考になるご意見をいただいた。入館者の数も大事だが、数だけを追い求めるのではなく、実際に訪れる回数は少なくても、市民にとって自慢できる美術館になれる、存在価値のある美術館になるよう努力していく。3月に放映されたドラマのように撮影場所になるとPR効果が大きいと感じた。

会長:紀要の外部の方が編集委員となっているが査読制をとっているか。
年報に修復作品の有無、展示環境、保全環境取組の記載があった方がよい。
豊田市美術館の使命、基本的な活動方針をホームページで公開しているか。

事務局:厳密な意味での査読制度ではないが、編集委員の方に原稿を書くにあたってアドバイスや修正をしていただき、客観性を担保している。
年報の記載に関しては、修復の記録の保存の意見もあることから、再度検討していく。ホームページもリニューアルを進めており、方針等も掲載する準備を進めている。

会長:美術館運営全般についてご意見があれば、どうぞ。

委員:運営協議会での協議のポイントを事前に周知すれば、会議が円滑に進行すると思う。協議会での意見が美術館の運営にどのように反映されたのか、教えてほしい。

会長:運営協議会が改善のための場になるよう、どのように対応できるか事務局の方で検討してほしい。

会長:以上で本日の議事をすべて終了しました。協議事項を終了します。